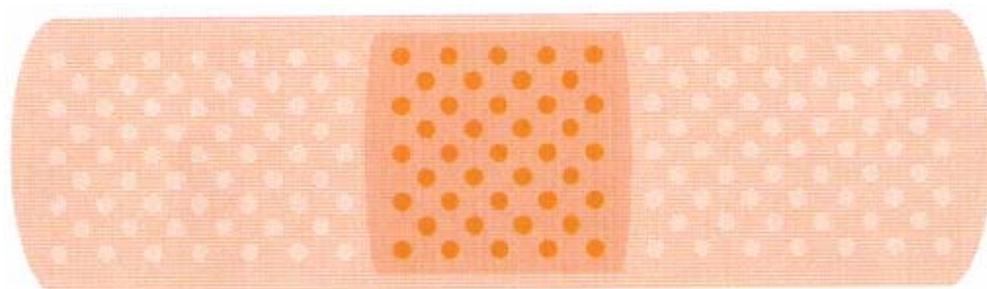


おにいちゃんが病<sup>びよ</sup>気<sup>うき</sup>になったその日から



作, さがわ なつこ

## 「はじめに」

——病気のお子さんがいらっしゃるご家族へ——

家族の誰かが病気になって入院するということは、家族全員にとってとても不安なことです。特にその本人が子どもたちであれば、周囲で起こっていることが理解しがたいだけになおさらかもしれません。病気になった本人がつらいことはもちろんですが、その兄弟姉妹たちもつらいのです。

この冊子は、自らが病気の弟を持った佐川奈津子が自分の体験をもとに書いた童話です。病気の兄弟姉妹を持つ子どもたちは、さまざまな感情を体験しながらそれらをうまく表現できずにその気持ちを心の奥深く押し込めてしまうことがあります。その結果、子供たちが成長した時、昔表現することが出来なかった様々な思いによって成長を阻まれることも起こり得ます。アメリカでは、このような兄弟姉妹たちを支えるグループやセラピーのプログラムがありますが、日本ではまだそのような動きは少なく、病気になったお子さんの兄弟姉妹のことに十分な配慮がなされていないのが現状です。

この物語は病気の兄弟姉妹を持つ子ども本人と周囲の人々が、このような経験を少しでも理解し、受け入れていってくれることを願って書かれたものです。この物語が少しでも多くのかたの目に触れ、何らかのお役に立つことを願っています。

(監修者：渡部律子)



ぼくの家族は、4人。おとうさんぐまに、おかあさんぐま、いつもいっしょに遊んでくれるおにいちゃんぐまにそして、このぼく。

みんなからは、「大きいのにとてもやさしくて、すてきな家族だね!」とよく言われる。

ぼくの自慢の家族なんだ。エヘン!!

ぼくの家となりには、ちょっと小さくて、あわてんぼうのうきぎさん一家が住んでいる。

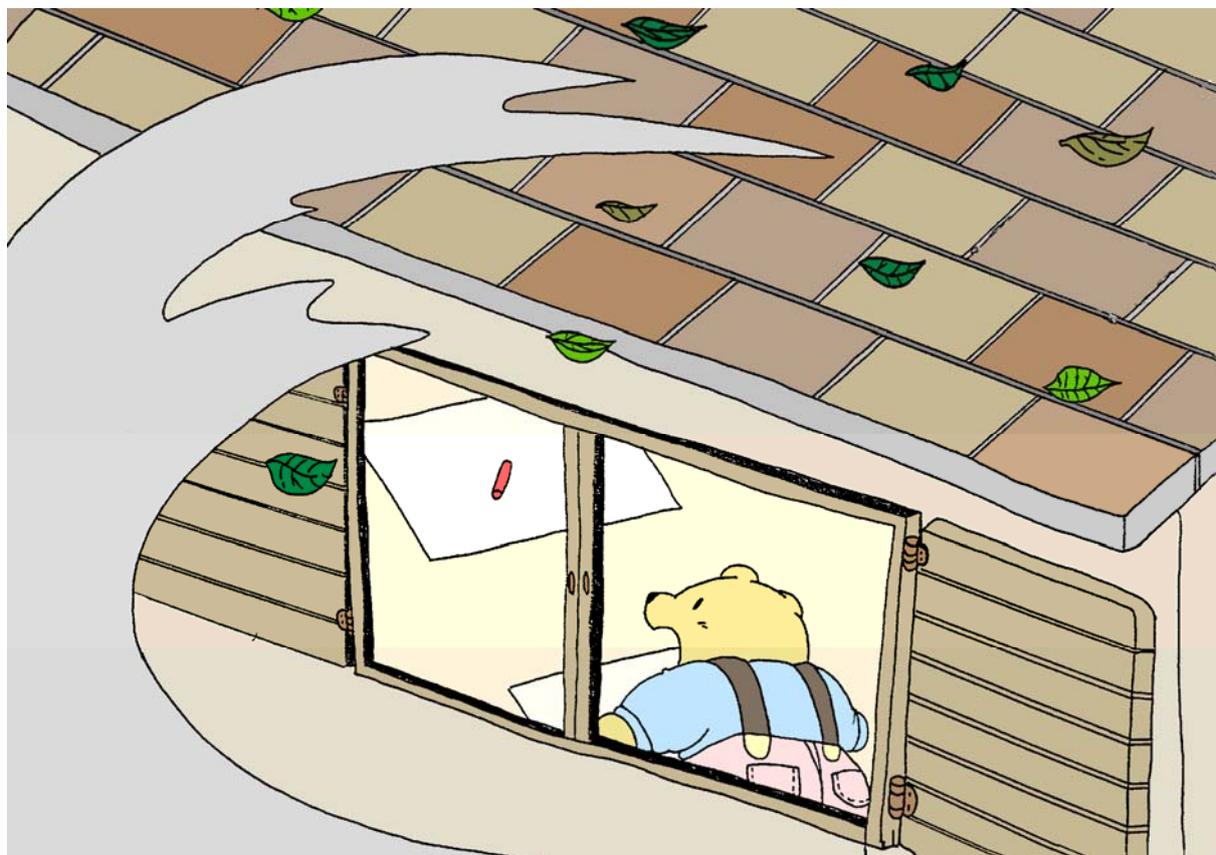
毎日ぼくたちは、うさ君とうさちゃんを誘って、日が暮れるまで森の中で遊んでいるんだ。

そんなある日、ぼくにとって、とても恐ろしく長い長い一日がやってきた。  
その日はちょうど季節はずれの台風のようで、となりのうさぎさん一家は、南の島に旅行中  
だった。

外で遊べないぼくとおにいちゃんは、仕方なくふたりだけで絵を描いて遊んでいた。

「ねえねえ、おにいちゃん。ぼくの絵、おにいちゃんのより上手だよ！」って言って、競争  
していたんだ。

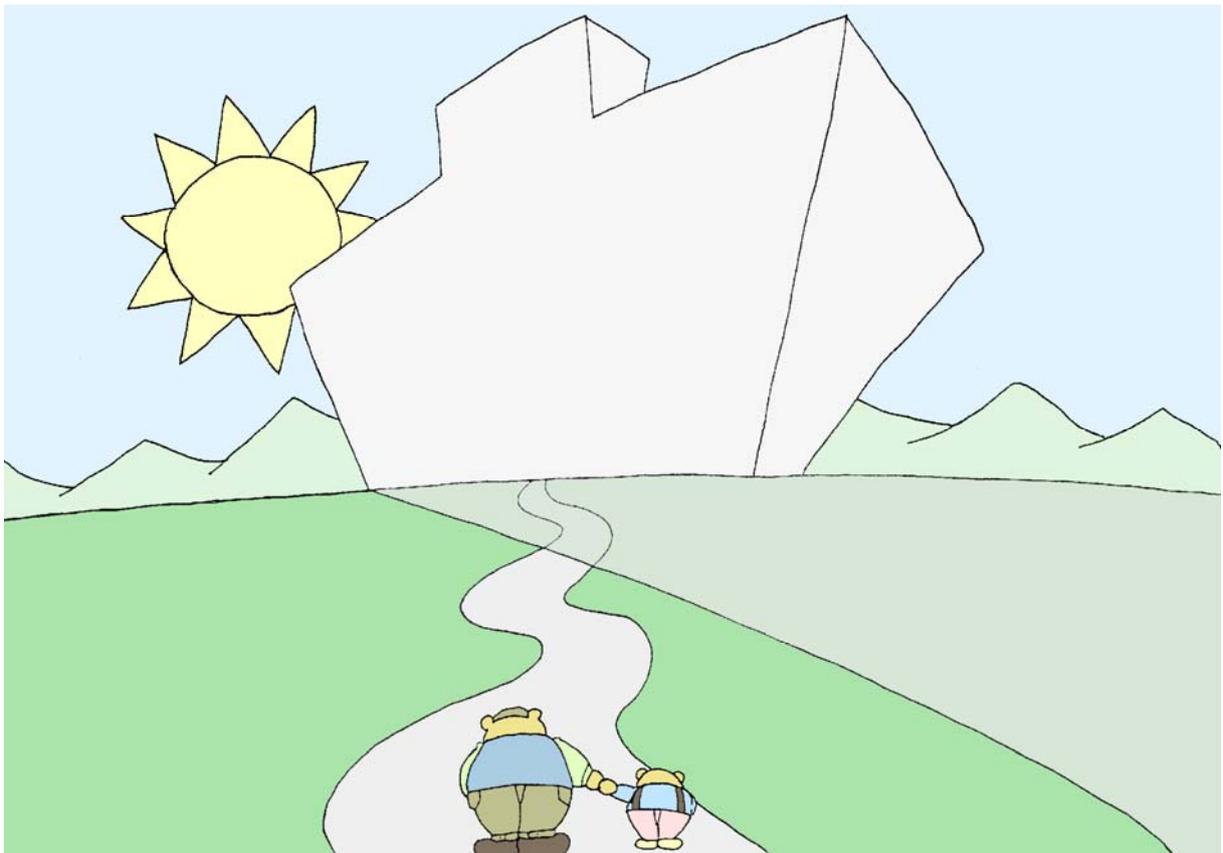
すると、突然おにいちゃんがクレヨンをポトンと落として、「おかあさん、頭が痛いよ！！」  
って叫び出したんだ。いつもあんなに我慢強いおにいちゃんが、泣きながらおかあさんと呼ん  
でいるんだ。ぼくは、なんだかとても怖くなって、その後のことはよく覚えていない。だけ  
ど、ひとつだけちゃんと覚えていることがある。それは、その日からぼくの家におかあさん  
とおにいちゃんがいなくなっちゃったことだ。ぼくには、いったい何が起こったのかわからな  
かった。夢を見ているのかと思ったけれど、なぜか怖くて怖くてからだの震えが止まらな  
かった。だけどぼくは勇気を出して、おとうさんに聞いてみた。「おにいちゃんとおかあさんば  
どこに行ったの？」

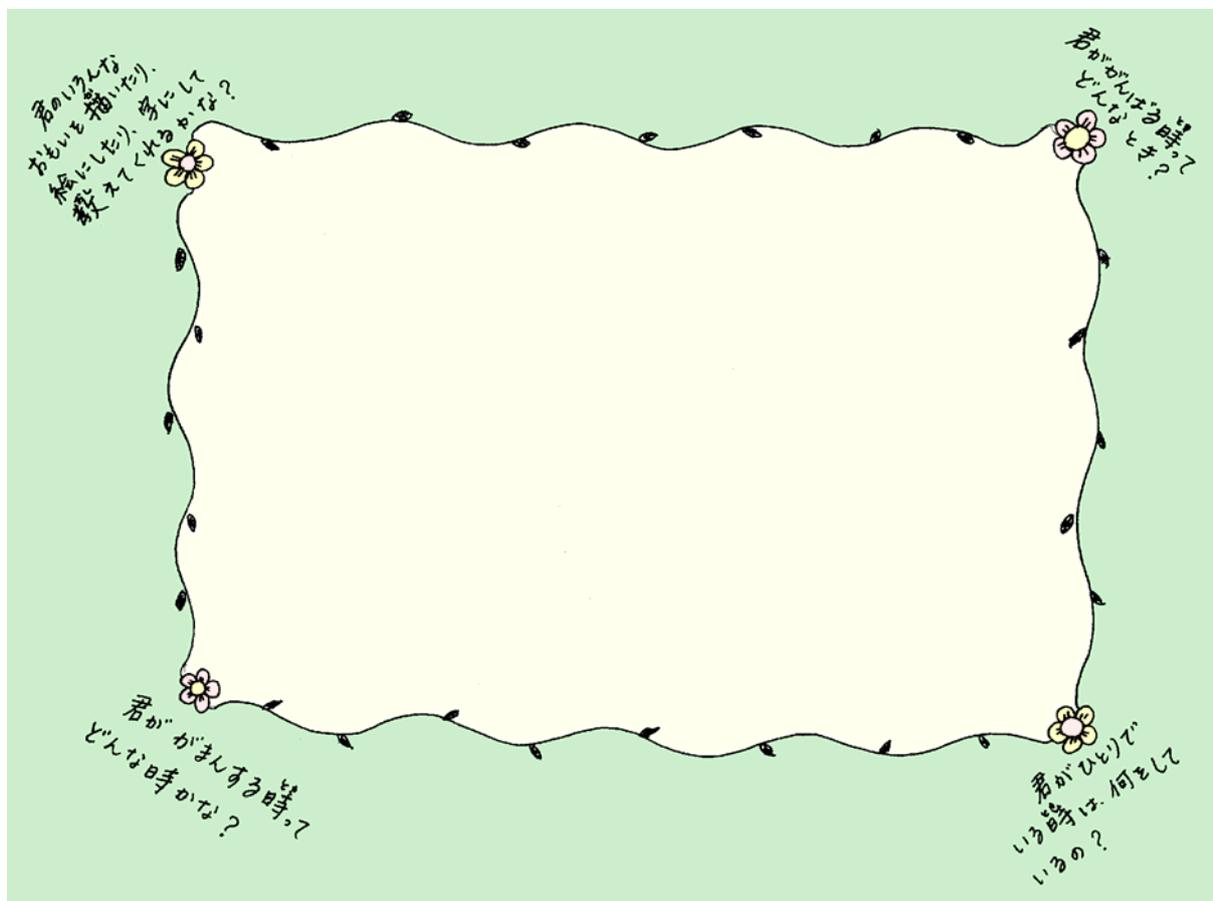




いつものおとうさんは、とても大きくて温かくて頼りがいがあるのに、その時のおとうさんは少し冷たくて少し小さくて怒っているようにも見えた。そしてぼくのしつもんには何も答えてくれなくて、おとうさんまでどこかへ急いで行ってしまった。ぼくはたったひとりぼっち、広い家の中でますます怖くなり、泣きそうになるのをひたすらこらえながら、おにいちゃんとおかあさんがぼくのところへ帰ってきてくれるのを待った。ぼくは暗い部屋の中で、ひとり震えていた。けっして、寒かったんじゃない。何が起きているのが、まったくわからなかったことがぼくにとってすごくすごく怖かったんだ。

ぼくがおにいちゃんに会えたのは、それからしばらくしてからのことだった。  
ぼくはおとうさんに連れられて、大きな白い建物の中へ入っていった。どうやらこの病院に  
ぼくのおにいちゃんはいららしい。“とうとうおにいちゃんとおかあさんに会えるんだ。”そ  
う思うと、ぼくはうれしくてドキドキしていた。それなのにおにいちゃんは、いろんなもの  
をからだにいつぱいつけて、ベッドで寝ていた。遊べそうにはなかった。“どうしたんだろう？  
何が起こったんだろう？元気がいいのおにいちゃんはどこへいつちやっただろう？”ぼ  
くの頭の中は、わけが分からないことだらけでグシャグシャしていた。せつかくおにいちゃ  
んとおかあさんに会えたのに、ぼくは泣きたくなった。そしてぼくは今すぐにこの病院をぬ  
けだし、家まで走って帰りたいくなったんだ。

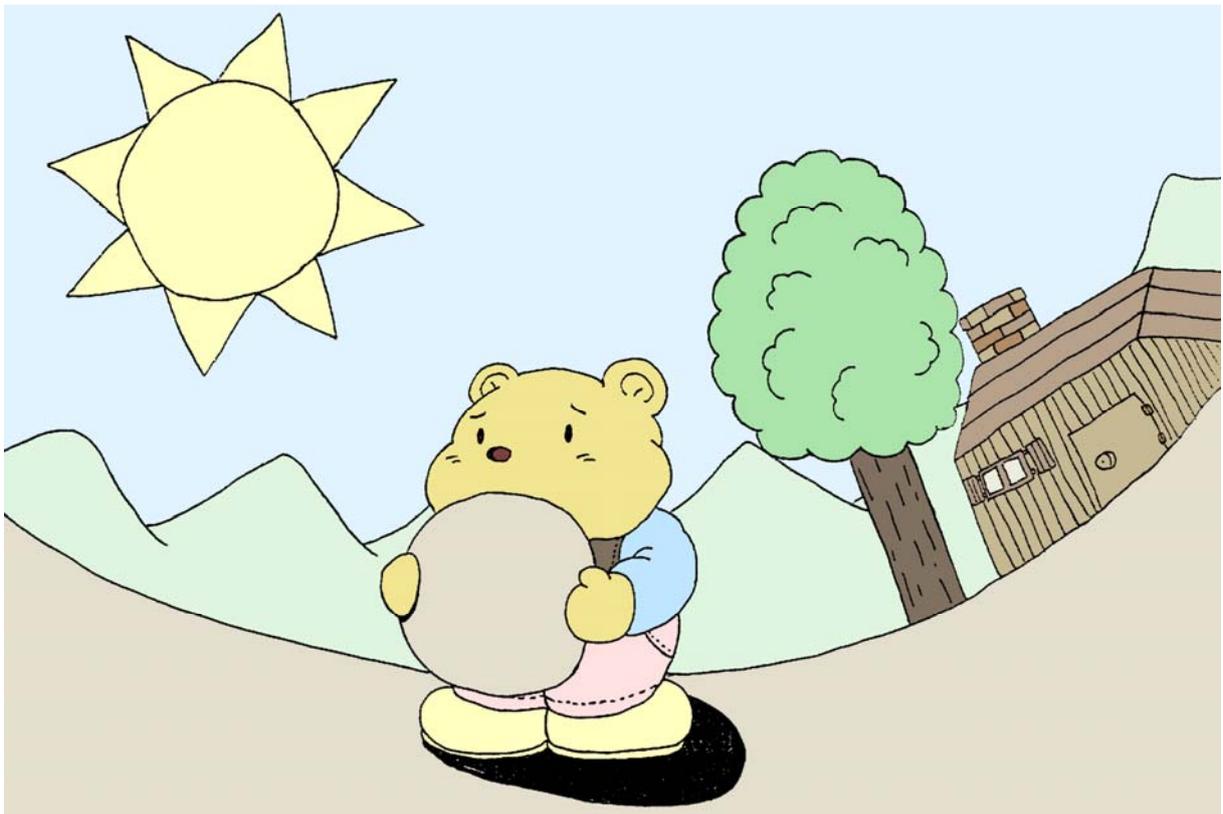


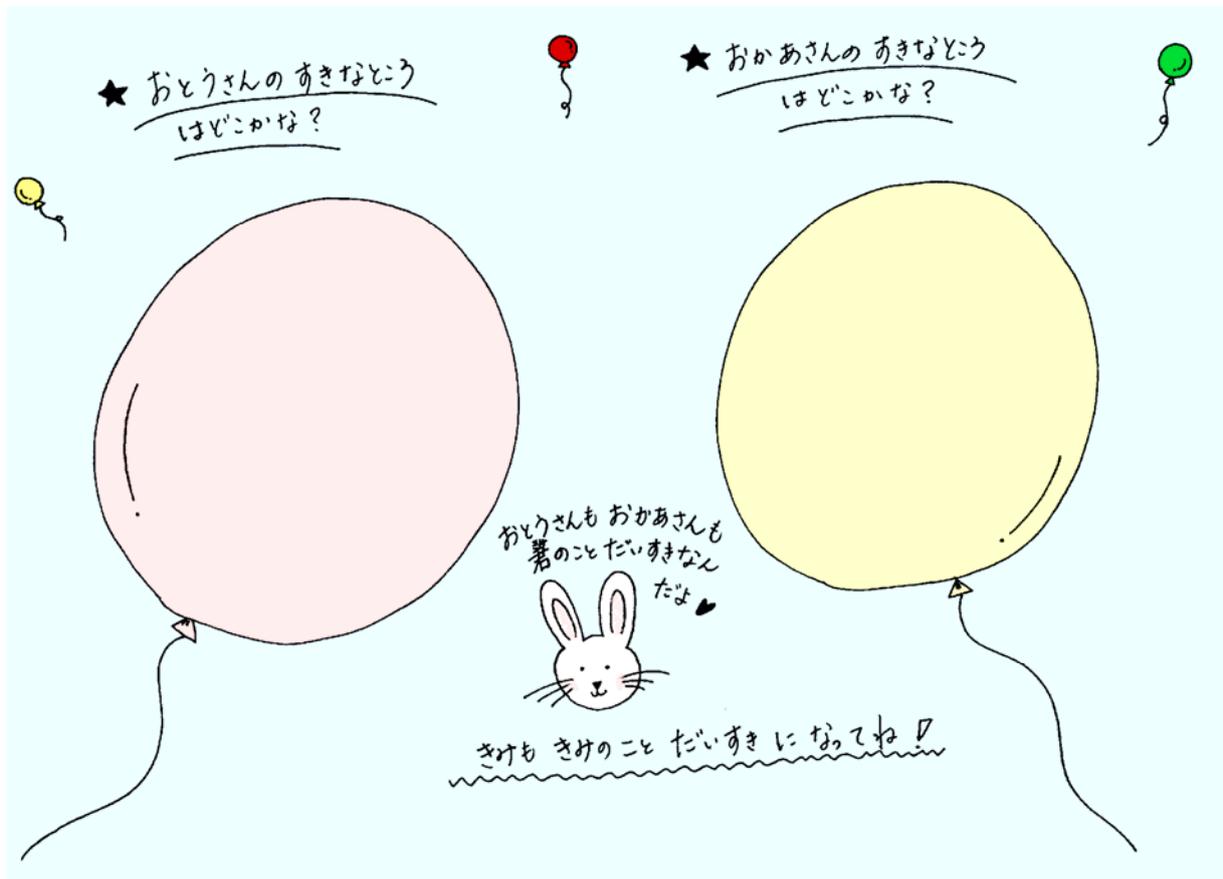


“ぼくの家族はどうしちゃったんだろうか？これからどうなるのだろうか？”また頭の中でいろいろ考えていると、おかあさんが無理にぼくにほほえんで言った。「ひとりでさみしいだろうけど、おにいちゃんはもっとがんばっているから、がまんしていい子でいてね。」ぼくは、泣きそうになるのをこらえながら心の中だけで“そんなのいやだよ！”って叫んだ。だって、あまりにもいっぱいがまんしなくちゃいけないことがあるんだもの。でもぼくは、おかあさんを悲しませたくなかったので、おとなしく「うん」と、うなずいた。そして、こう思った。“ぼくさえがまんして、おとなしくしていればおにいちゃんは元気になるんだ”

ぼくは約束どおり、おとなしくいい子でいた。けれど、おにいちゃんもおかあさんもなかなか帰ってきてはくれなかった。おとうさんは、このごろますます無口になって、むかしのよう(もろ)にキャッチボールをして遊んでくれなくなった。うさぎさん一家も遠慮して遊びに誘ってくれなくなった。ぼくはいつもひとりぼっちだった。

“おにいちゃんは、ぼくからおかあさんをとったんだ。ひとりじめしているんだ。”(おとも)って思ったとき、ぼくはじぶんでじぶんをしかった。“おにいちゃんは病気なんだ。ぼくとはちがうんだ。元気なぼくはがまんしなくちゃいけないんだ。”(げんき) ぼくは何度も何度も心の中でそうつぶやいた。なのに、ときどきおにいちゃんのことを嫌いなぼくがいた。





ぼくは毎週おとうさんと、おにいちゃんの病院に行った。そこでぼくはよくおにいちゃんとふたりきりにさせられた。ぼくの想像だけど、そのあいだおとうさんとおかあさんは、病院の先生とおにいちゃんのことについて話し合っていたんだと思う。

おにいちゃんは、病気になってからすこし変わったとぼくは思っている。それがいいことなのかどうかは、分からないけど。たとえば看護婦さんと遊んでたのしかったとか、おかあさんがどれほどやさしかったとかを、ぼくに自慢するんだ。そんなとき、ぼくは涙をこらえて“いじわるなおにいちゃんなんか、大嫌いだよ！！”って思った。

病院に行くたびに、おにいちゃんのきげんは違った。ほんとうにしんどそうなときもあったし、ぼくのことをわざと無視するときもあった。病気になる前のやさしいおにいちゃんときは、いろんな楽しい話をしてくれた。

春になり、ぼくはまたひとつ上の学年になった。けれども学校のことなんかちっとも頭の中になくて、おにいちゃんの病気のことでいっぱいだった。おとうさんもおかあさんも、ぼくにおにいちゃんのことは詳しく話してくれなかったから、やっぱりぼくはあの日のまま分からないことだらけで、胸のあたりがもやもやしていた。

ぼくは、だんだんひとりでいるさみしさには慣れていった。けれどひとつだけ、どうしてもがまんできないことがあった。ぼくは毎週、ちゃんとおにいちゃんの病院にお見舞いに行っているのに、病院の先生も看護婦さんも、となりのベッドの人も、違う病気でおにいちゃんと仲のいい人も、ぼくにはなんにも声をかけてくれないんだ。声をかけてくれるときには、「きみのおにいちゃん偉いね！」だった。“ぼくががんばっているから、おにいちゃんだってがんばれるんだ！！”って思ったけど、そんなこと思う子は“いい子じゃない”って分かっていたから、ほんとうのぼくの気持ちはどこか知らないところへ飛ばしてやった。

ぼくのほんとうの気持ちってというのは、たぶん誰かにしばらくの間いっしょに居てほしかったんだと思う。だけどおにいちゃんのことを考えたら、けっして言えなかった。





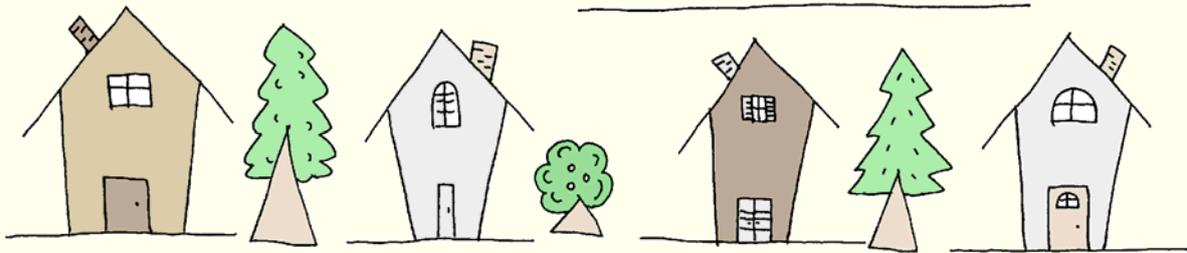
きめて。どんな人なのかな？ 教えて！！

---

---

---

---



ぼくはおにいちゃんの病気が長くなるにつれて、“わがままなじぶん”と戦わなくてはいけなくなっていた。“わがままなじぶん”とは、“ぼくだっておかあさんといっしょにいたい！！”という思いだった。これだけは消そうとしても、どこへも消えてはくれなかった。ぼくは“おかあさんをひとりじめしたい”と思うじぶんが大嫌いだった。だってそれは、“いい子じゃない”から。おにいちゃんはあるなにかがんばって病気と戦っているのに、ぼくはどうしてこんなわがままを言うのだろうか？

ぼくは……悩んだ。

ぼくは……苦しかった。そしてぼくはさみしかった。

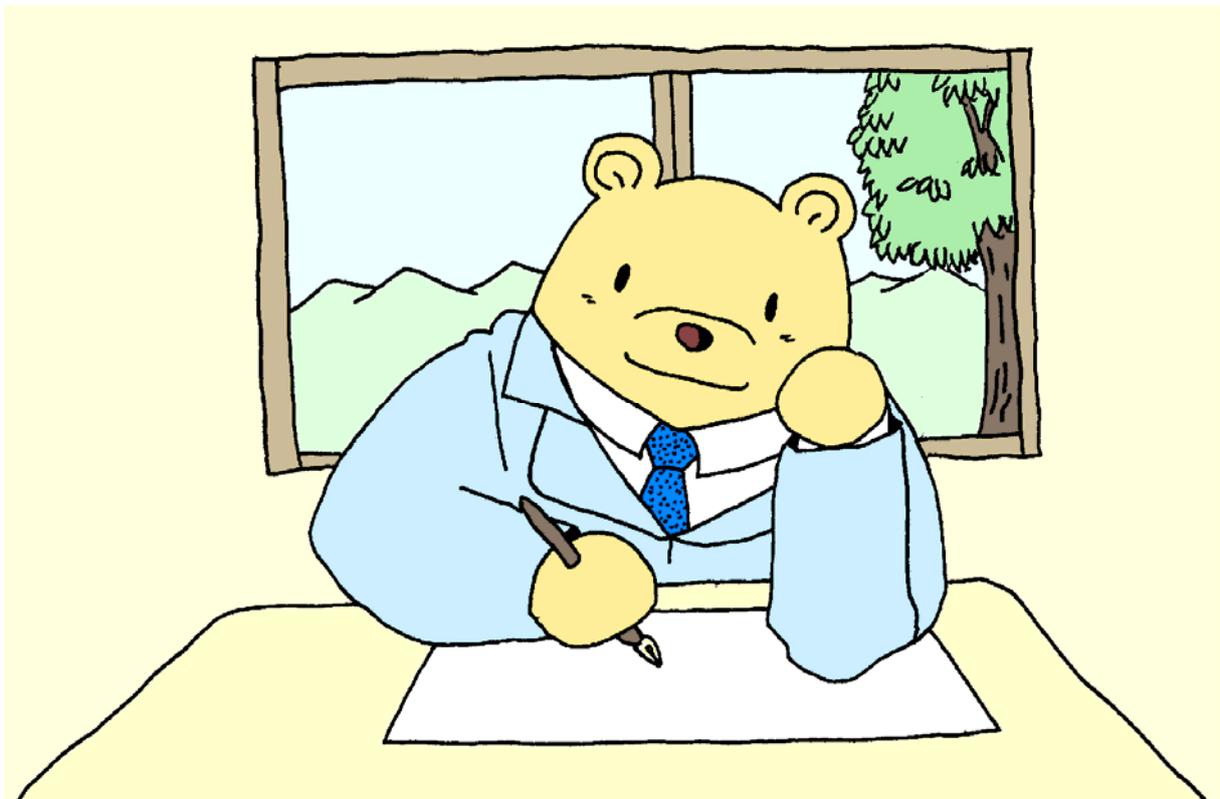
もうぼくの心の中の中は、おにいちゃんのことなんかどうでもよくなっていた。それよりぼくは、やさしかったおかあさんと、頼りがいのあったおとうさんといっしょに居たかった。ぼくだけのために、いっしょに居てほしいと強く願うようになってしまったんだ。ぼくの心の中はいつしか「ぼく」が中心になっていた。そのたびにやっぱりぼくは、じぶんをしかった。

あれから何年もたって、ぼくは大人になった。

けれどいまだにぼくは、おにいちゃんが病気とがんばって戦っているときに“じぶんのことしか考えなかったぼく”をしかっている。おかあさんの大変さ、おとうさんの不安、おにいちゃんの苦しさをどうしてぼくは分かってあげられなかったのだろうか、ってぼくはじぶんに腹を立てているんだ。

でも、大人になった今、ぼくは分かったんだ。そのなかに、ぼくのさみしさをいれればよかったってことが。そう、いれてもよかったんだ。だってぼくたちは家族で、みんなそれぞれに苦しかったんだから。誰が一番がんばったとか、ぼくはいい子じゃなかったとか、そういう問題じゃないんだ。家族の誰かが病気になるってことは、とても大変なことで、みんながそれぞれに悩んだり、我慢したりして成長するんだと、ぼくは大人になってからはじめて気がついた。

そして、ぼくはじぶんの気がついたことで、少しでも早く“ぼくをしかるじぶん”がいなくなればいいな、と思っている。それはとても難しいことだけれど、今日もぼくはいちど嫌いになってしまったじぶんのことを、好きになれるようがんばっているんだ。(おわり)



(あとがき) ~病気と戦っているきょうだいがいる、あなたへ~

私はあなたのきょうだいが病気になったその日から、あなたのきょうだいのことではなく、あなた自身のことが心配でした。なぜなら、あなたがとても寂しそうに見えたからです。そしてあなたが自分でも気がつかないところで、すごく無理をしてがんばりすぎていると思ったからです。

ごめんなさい、あなたがいくらがんばって寂しさを・腹立たしさを・表現しにくい怖さを隠そうとしても、私には分かってしまうのです。なぜなら、私も遠い昔は“あなた”だったから。寂しく、心細く、それでも病気になったきょうだいがまた元気になるために、涙も見せず頑張って笑っていた“あなた”だったから。

私は、あなたを想像してこう思います。苦しいとき、病気になったきょうだいのまわりには、いつも病院の先生や看護婦さんが居て、「がんばってね！」と声をかけてくれるのに、あなたには？寂しいとき、お父さんやお母さんたちまでもあなたのきょうだいには温かく、優しく微笑みかけて、「大丈夫だからね！」と勇気づけてくれるのに、あなたには？

あなたが寂しいその時、誰か気がついてくれる人がいますか？温かく声をかけて、励ましてくれる人がいますか？私は、あなたにたとえ声をかけてくれる人がいたとしても、“平気だよ”と言って、自分に嘘をついているのではないかと思うのです。なぜなら、「いい子」でいたほうがみんなから好かれるから。違っていたらごめんなさい。私は、寂しい時こそ“平気だよ”と自分に嘘をついて、もっと寂しくしてしまっていました。だからあなたのことを想像した時、決して同じようにはならないでほしいと強く思うのです。もしあなたが、昔の私と同じような気持ちを抱いているのなら、寂しい時には嘘をつかないであげてください。きょうだいがある日突然、あなたの知らないところで病気になったのに、平気なわけありませんよね。寂しくて、心細くて、それでもあなたの役は、元気いっぱいに笑っていることかしら？それとも、わざといつも楽しくないように振る舞うことかしら？そんなの本当のあなたじゃないわよね。

あなたの周りの人たちがみんな、あなたのきょうだいのことばかりに夢中になってしまうのは当然のことで、仕方のないことです。だからといって、あなたのことを愛していないというわけではありません。ただいろんなことが、次から次へとやって来て、あなたのことを考えてくれる“ゆとり”が少しなくなってしまうだけなのです。それを「我慢したほうがいい」とは、言いません。なぜならあなたは、ひとりきりで家にいる時も、きょうだいICUに入って会えない時も、

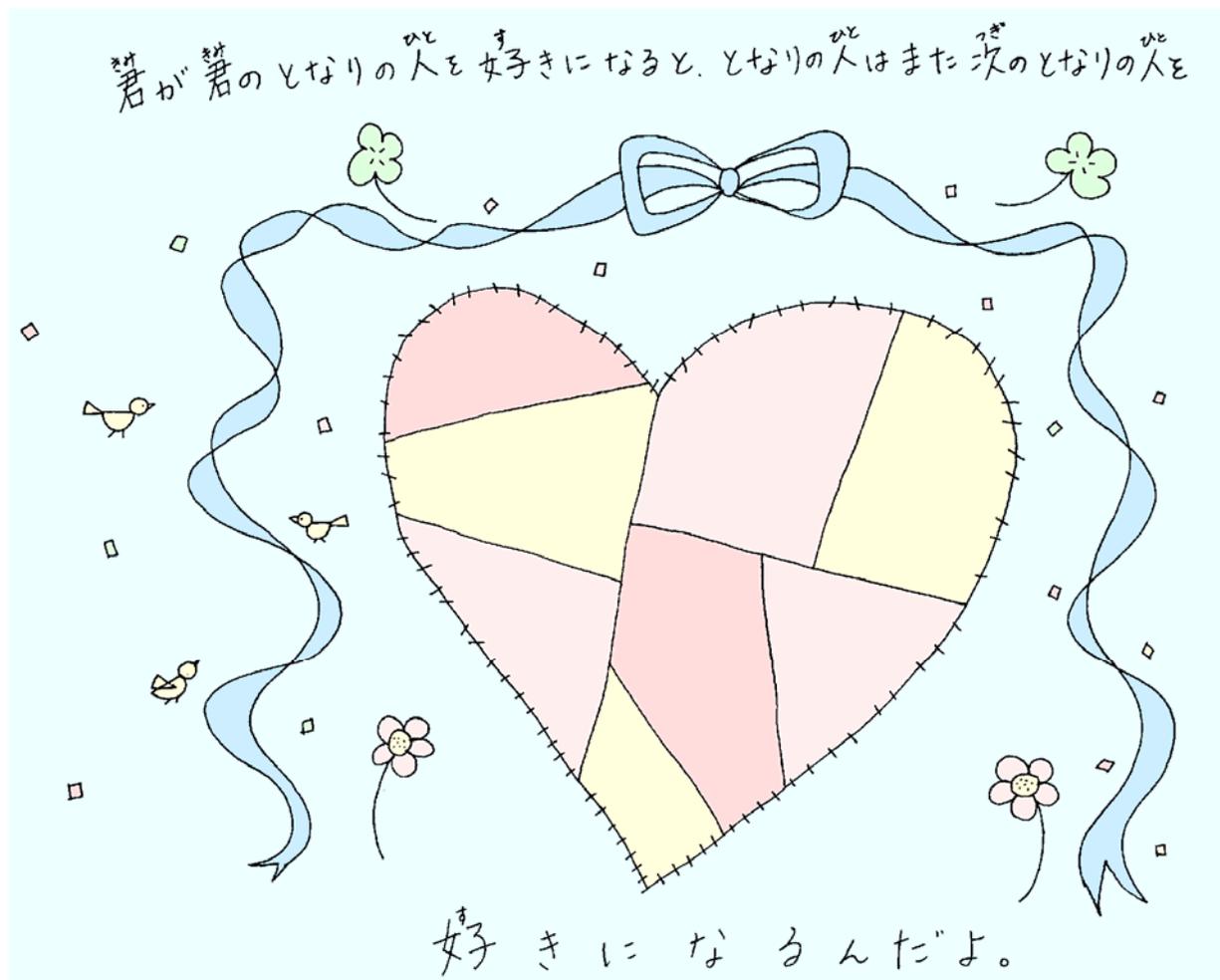
ちゃんと自分の足で立ち、自分と向き合っている立派な人だもの。

きょうだい時々するいじわるな行動も、「許したほうがいい」とは言いません。なぜならあなたはもう十分にがんばっているのだから、私は今のままのあなたでいいと思うのです。十分にがんばっているあなただからこそ、がんばりすぎて自分自身を見失わないようにしてください。

例えば、今までにぎやかだったはずの家に一人きりでいる時、寂しくなってしまうたら、“さみしい”って心の中の自分にちゃんと伝えてほしいのです。あなたよりも先にお父さんが出かけてしまった朝に、あなただけが後から起きてきたら、たとえ誰もいなくても黙っていないでちゃんと“おはよう！今日もいい一日にしようね！”って声に出して、自分の心に伝え

てほしいのです。馬鹿みたいなことと思うかも知れないけれど、「自分の本当の気持ちを知る」ということは、自分を受け入れるというとても大切なことなのです。まわりの大人の人たちが、またあなたを愛し始めてくれるまで、あなたは自分自身のことをありのままに受け入れるという大きな役目があります。身勝手な自分のことも、優しい自分のこともそのまま自然に受け入れてあげなければ、あなたの心はひとりぼっちになってしまいます。

おいしいものを食べたら、おいしいって思っているのです。学校で楽しいことがあったら、話しているのです。でも、まわりの大人の人からは、病気のきょうだいのことを考えてあげなさいって怒られるかもしれません。それでも大好きな自分のために、楽しかったら、笑ってあげてね。苦しかったら、声に出して言ってね。悲しかったら、泣いてね。腹が立ったら、怒ってね。私は、がんばっている時のあなたも大好きだし、くじけそうになっている時のあなたも大好きです。心優しいあなたは、自分は何にも頑張っていないと思う時があるかも知れない。でも、本当は違うんだよ。あなたは、あなたのきょうだいと一緒にがんばっているのです。目には見えないけれど、あなたの大切なきょうだいとおなじようにあなたもまた、病気と戦っているのです。私は、そんなあなたが好きなのです。



おにいちゃんが<sup>びょうき</sup>病気になったその日から

平成 11 年 9 月 18 日 初版第 1 刷◎

平成 11 年 10 月 28 日 初版第 2 刷

平成 11 年 11 月 8 日 初版第 3 刷

平成 11 年 11 月 21 日 初版第 4 刷

作 者 さがわ なつこ

挿し絵 大西 亮

発行人 佐川 奈津子

〒669-1323 兵庫県三田市あかしあ台 5-3-6

制作 株新風書房

〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町 5-17

TEL 06-6768-4600 FAX 06-6768-4354

印刷所 株新聞印刷出版事業部